

〔翻訳〕

エドウィン・ロバートソン著

『揺るぎなき友 ジョージ・ベルとドイツの教会』 一九九五年より

「神の国と人間社会との関係」^{*}

山崎和明^{**}

第二章 神の国と人間社会との関係

一九二五年八月二十九日、ストックホルムで開催された世界教会会議の席で、カンタベリーの首席牧師G・K・A・ベルは、近い将来さまざまな国の代表が、カンタベリー大聖堂の庇護の下で、共通の知的職務のために共に会するよう希望すると表明した。彼はストックホルム神学委員会議長アドルフ・ダイスマン博士に相談したところ、イギリスとドイツとの二国間だけ（の会議）ではあったが、彼の希望は一九二七年四月に実現した。一週間にわたり、十三人のイギリスとドイツの神学者が、「共通の知的職務」に携わった。「共通の知的職務」とは、ストックホルム会議の主要事項、「神の国の本質と人間社会との関係」であった。

神学的責任

イギリスとドイツの神学者たちは、諸論文を読み、時の社会問題に関連する疑問にたいして、それらが述べている様々の解釈について十分に論議した。戦争中に自らが体験した種々の経験を互いに共有し、異なる立場から眺めた。彼らの激しいやり取りは、それ自体に確かな効果があった。この議論で、ベルとドイツとの関係は確実に固まった。この関係は、両国において実り豊かなものとなつていくのであった。また、ベルには、諸教会の〈最前線部隊〉である小教区の司祭 (parish priests) や牧師 (pastors) にたいする神学者としての責任がいかなるものであるかという明確な理念があった。

ストックホルムとカンタベリーにおける二回の会議の報告は、会議の参加者たちからの寄稿論文を核として、一九三〇年に発行された『キリストの秘義』の中でなされた。ベルは、「教会と神学者」という論文を、その最後に収録した。彼は、その論文中で、教会は神学者にたいして責任をもつが、また神学者も教会にたいして特別の義務をもつと論じた。彼はこの問題を、以下のように二つの観点から論じた。

「一方で、神学者は、小教区の司祭あるいは牧師と、また、その司祭あるいは牧師が日頃従事している職務と、ならぬか的人間的関わりを求めるべきである。神学者は、市場の雑踏から全く離れた状態にあつてはいけないし、また、市場の雑踏にある諸問題、あるいはそんな雑踏のなかで聖職者として奉仕する働きを、自分とは関係のないことであると考えてはいけない。そうしてさらに、神学者は、厳密に科学的な視点に立つて、人間の世界を理解すべきである。つまり人間は、人間の所に神が来ておられるから宗教的体験を享受し、享受できるのであり、そういう人間の思想、感情、そして行動が、神学者の資料の一部分（どんなに小さな部分であつても）になるのである。神学者は、いわば、こうした資料すべてを体系化し、たくさんある資料の一つ一つをその他の資料と関連付けねばならないのである。また、神学者は、その成果を人々に伝える人間であるから、他の人々の考えや関心事に対して敏感であることが必要である。確かに、神学者が専門的に人間の宗教的経験の意味を解釈するいくつかの神学領域で

は、神学者と宗教的経験との関係は、歌詞に曲を付ける作曲家とそれらの歌詞を作っている作詞家との関係に似ているかもしれない。作曲家は、できる限り歌詞を理解、解釈し、そして楽譜に表していくのであるが、それだけではだめである。歌詞について自分の感じることを表現し、さらに、歌詞に新しい力や情熱をつけ加えてよいのである。神学者の場合、歌詞に当たるのは人間の宗教的体験である。^①

このようにジョージ・ベルは、牧師との人間的な密接な関係が必要であると論じた。彼は、また、神学者は忍耐を学ばねばならないとの警告も付言した。神学者は、何よりも真理を第一としなければいけないが、しかし、新しく洞察したことがらを、それが及ぼすかもしれない弊害を考慮しないで誇示してはいけないのである。長老の神学者たちが集まる談話室 (the senior common room) での私的な議論は、たとえ教会新聞であっても、出版物の見出しにする必要はないのである。

「私的な見解と、教会の名の下で教えることとは別のものである。すべての人がその区別を守らなければならない。」^②

私たちがジョージ・ベルとドイツとのユニークな関係について理解するうえでさらに重要なのは、二十年代という早い時期から、彼は神学が孤立する危険性を見て取っていたことである。カール・バルトは、このことを、一九一四年、皇帝が始めた戦争を支持する署名者一覧を読んだ時に気づいたのであった。確かに、当時、神学者たちは、教会教区 (parishes) と接触していなかった。あの戦争で引き起こされた諸問題で、神学が牧師たちの仕事の助けになることはほとんどなかった。イギリスでは少しはましであったが、さほど良かったわけではない。危機の中で、神学は、役に立たなかった。

ダイスマンが、一九二七年のカンタベリー会議に出席するドイツの神学者たちはすべて青年であるべきだと主張した理由は、おそらくこれであった。

ダイスマン書簡

アドルフ・ダイスマンは、カンタベリーには出席しなかったが、テーマ「神の国の本質と人間社会との関係」の重要性を指摘する手紙を送ってきた。ダイスマンは、アングロサクソンとドイツとの間には神の国についての見解で妥協できない相違が存在するとの考えを拒否し、「むしろ、神の国の多面性は、教派を越えたエキュメニカルな力で支えられるなら、多様なキリスト教会においても一致する」という見方であった。^③同時に、ダイスマンは、その後の人生でジョージ・ベルと自らの関心事となった、「神の支配は、今日の時代の諸事にどの程度まで影響を及ぼすのか」という問題を提起した。ダイスマンは、カンタベリーの聖トーマスと国王についてC・F・メイヤーが書いた『聖人』から引用した。

「トーマスよ、汝は誰に訴えているのか」、「聖なる三位一体の神にか」と王は笑った。

「私は福音書に訴えているのです」。「福音書は、御自分には全く罪のない方についての記録です」とトーマスはささやいた。

「真の主教たる者の言葉とは思えぬ」と王は堂々たる態度で嫌悪感をあらわにした。「卑劣な異教徒の言葉である！神聖な福音の書は、真珠で刺繍した祭壇掛けにのせるものであり、世界の秩序や物事の実態とは何の関係もない。」^④

ダイスマンは、このスイスの詩人は古典的方法で問題を明瞭に述べたのであり、詩人自身は王の側にではなく、トーマスの側に立っていると語った。

彼岸的と此岸的

第一回英一独神学会議では、神の国には超越的な広がりがあることを見失わないように、また、あまりにも厳密に神の国を教会と同一視しないようにとの決定がなされた。エドウィン・ホスキンス卿は、はつきり次のように述べた。

「原始キリスト教にとつて、終末論像は、根本的に重要であつた。なぜなら、それが、神、教会、そしてキリスト教道徳の彼岸性をしつかり守り保持していたからである。」^⑤

C・H・ドッドは、すでに彼の実現された終末論を次のように展開していた。

「この世とあの世との間に飛躍的な差異があると考えるのではなく、私たちは、この世のなかで神の国は漸進的に啓示されるという考えを抱いている。しかしながら、この啓示のプロセスは、この世の内では完結しない。」^⑥

以上のことを、ベルは何度も聞いたに違いない。ドイツ人たちもまた専門的な神学論争をしていた。そうした論争の中から、ベルは、早くも一九二七年にドイツではナチズムの魅力が増大しつつある状況だと知つたのであつた。ミュンスターのシュテーターリンは、ドイツの若者と身近に接しており、次のように述べた。

「ナイーヴな事実ではあるが、生に関するこの世的規範を私たちの大望の目標^{ゴール}として追究していた時代は終わり、今日のドイツの若者は、究極の目的と究極の義務とを見出だせるような共同体生活の形態を熱烈に渴望するという経験をしている。ドイツ青年運動が問題としてゐるのは、神の国の問題なのである。したがって、神の国はこの世の生のあらゆる形態とは完全に対立すると見なせるのか、あるいは神の国の本質は、人間社会の何か特定の形態のシンボルを通して学べるのかということが、決定的に重要である。そして性愛の秘密が、あるいは国家の生が、神の国の秘義^{シークレット}の象徴として感じられるかどうかはどうでもよいことではないのである。国家とその法令とが真剣に尊重されていれば、神の国に対する個人主義的な、神秘主義的な、あるいは感傷的な誤解は起こらない。」^⑦

ヴィルヘルム・シュテーターリンは、ドイツ人神学者チームの重要なメンバーの一人で、ベルに大きな影響を与えた。二

人はほぼ同年齢で、共に、大学での学生活動に力を入れていた。またさらに、牧会の仕事にもかなりの経験を積んでいた。ベルは、リーズでの三年間の副司祭として (as a curate) の牧会活動から非常に多くのことを学び、オックスフォード大学での学監 (as a don) として、短期間ではあったが、学生たちと活動する経験をした。

シュテーリンは、ニュルンベルクの聖ロレンツ教会の牧師を経て、当時、ミュンスター大学の神学の教授であった。ベルは、彼とは対照的に、常に自分は神学者ではないと主張し、特に、国家と教会の関係という領域で神学的疑問を問いかけていた。ランドール・デイヴィッドソンのところでの司祭 (chaplain) 時代の経験と、一九二八年の祈祷書論争の経験を通して、ベルは、再び国家と教会の関係という領域に入った。祈祷書論争はドイツ人に大に関心を懷かせたが、それはカンタベリー会議以後のことであった。シュテーリンはドイツにおける青年運動に深く関わっていたので、ベルは、牧会者としての関心から、シュテーリンの発言に耳を傾けるようになった。彼はまた、以下のようなシュテーリンの率直な取り組み方に好意を寄せた。

「この世の生 (活) の諸機構に積極的に関与せずに、その責任を回避するキリスト教徒は誰でも、神の国を、単純に内的なものか、あるいは、何か全く不可視の彼岸のものか、そうでなければ、全くこの世では実現することのない、未来への希望にしてしまう。こうして、神がこの世の主であるという神の主張は受け入れられず、人間の生 (活) の諸機構は、悪魔の力に引き渡される。こうしたことは、私たちの学究的、政治的生活という広範なコンテクストの中におけると全く同様に、男女の関係や国民のあいだの結束 (national associations) においても明瞭に現れている。」⁽⁸⁾

民族運動 (The völkisch Movement)

ヴィルヘルム・シュテーリンの聴衆——中でも、私の知るかぎり、ベルが最高の聴衆であった——は、シュテーリンの論文の中であらうと、会議の合間の非公式な多くの議論の中であらうと、ドイツの状況の解明に新鮮な光が投げかけ

られているを感じた。もし十年後に、ナチズムの恐怖が寝耳に水のように私たちに不意打ちを食らわせたというなら、それは、私たちが彼の言うことに耳を傾けていなかったからである。ベルは聞いていた。ドイツについてシュテーリンが述べていたのは、後にヒトラーの呪術に完全にかかってしまうことになる若者のことであった。

シュテーリンが述べていた民族運動は、自らの文化にアイデンティティーと誇りとをもつ民族であるという強い意識に基づく運動のことであり、通常、歴史的使命をもつ民族であると自覚することを意味した。ナチズムの発生にとつて民族運動がもつ重要性について、クラウス・ショルダーは次のように説明している。

「いわゆる民族運動あるいは民族思想の展開は、第一時世界大戦中およびその後に起こった最も重要な事柄の一つであると理解されなければならない。そうしたことが起こらなかったなら、ナチズムの拡大は考えられない。じつさい、ナチ党NSDAP（国家社会主義ドイツ労働者党）は単に一つの民族運動であった。マルクス主義が共産党という政党の形に体现されたように、この運動も政党になったのである^④。」

この理解があつたからこそ、ベルは、他の教会指導者たちがナチズムをヨーロッパ文明に対する脅威として深刻に受け止め始めるずっと以前に、ナチズムの性質について認識できたのであつた。彼にとつて、ヴィルヘルム・シュテーリンにまさる情報提供者が、二十年代にはいなかったに違いない。

多くの人々は、民族運動を歓迎した。なぜなら、それがドイツの若者たちに目的と希望とを与えてくれるかのように思えたからであつた。それが異教（Pagan）である危険性を秘めていると恐れた人もいた。しかし、シュテーリンは、原則的には、それを歓迎できるとしても、その中にある特定の要素に関しては、依然として批判が残りを示した。一九二四年、彼がまだニルンベルクの牧師であつたとき、ある運動に対して、彼は、教会の青年活動にそれを採り入れてもよいと考え、好意的に対応した。彼は、その運動の危険性に対しては目を大きく見開いて対応した。彼は、その運動について講演し、その後その講演は出版された。彼は、その講演で、民族運動において正当であるのは何なの

かを積極的に考察した。自分の祖国を恥じてきたドイツの若者たちにとってその運動がもつ魅力を彼が理解していることを示した。彼らは、ドイツ人であることに誇りを持ちたいと望み、また先の世代によって引き起こされた戦争の罪のために不利益を被らないことを望んでいた。シュテーターリンはこの気持ちに理解を示した。それゆえ、彼がその運動を批判するようになった時でも、彼への信頼は非常に厚かった。彼は、その運動には主な三つの側面があることを認識していた。すなわち、〈「ドイツ」民族であることを経験する〉、〈「ドイツ」民族の構成員間における団結の自覚〉、そして〈行動への意志〉である。彼は、この運動に価値を認めた。なぜなら、この運動は、人間崇拜あるいは階級闘争という罠に陥った、根無し草的で傲慢な私たちの同時代人に対して、彼らが世界の特定の場所と、また彼らの生が歴史の特定の時代と密接に結びついていることを明らかにしたからであった。¹⁰⁾

シュテーターリンはまた、隣人との新しい関係、すなわち、団結を歓迎した。行動する意志というのは、彼にとつては健全だと思えた。なぜなら、たとえ〈穏やかな合理性や目的の透明さ〉が欠如していても、高尚な目標を目指す激しい活動にはそれ自体に価値があるから。しかし彼は、どれほどたやすくこれが別の目的に利用されるかを知っていた。そして、すでに諸々の深刻な弱点に気付いていた。つまり、民族的な活動は、それ自体が目的となったとき、本質を喪失する危険性があるという弱点に。人は自己の罪を忘れ、安直で楽な解決をしようとするようになる弱点に。そして最終的には、〈途方もない大失態〉とか〈洞察力と品性を欠いた恥ずべき印〉と彼が呼んだ、反ユダヤ主義に飛び込むという弱点に。彼の講演は、今日ならナシヨナリスティックに聞こえる。しかし、当時まだドイツ・プロテスタント教会が、こうした広く行きわたっていた民族運動との関係をはっきりさせていなかったことを、私たちは思い出す必要がある。ある人たちは、その運動の民族的な野望を歓迎し、その運動が法と秩序を肯定していると承認し、マルクス主義と〈拝金主義〉に反対する闘争に加わる用意があった。「民族」運動に希望を見いだしていた同じ人たちはまた、そこに聞こえる耳障りな反ユダヤ主義、すなわち、その政治運動のやり方に嫌悪感を抱きもした。そして彼らは、そこに見出される宗教的主張に断固として抵抗した。シュテーターリンの主張で、私たちの理解にとって最も助けとなったところは、この部分であった。シュテーターリンは、もしその運動に言外の宗教的含蓄が込められているなら、その「民族」運

動は危険であることを確実かついよいよはつきりと悟った。シュテーターリンは、若者たちがそうした「民族」運動の中に見出した新しい希望に対して肯定的に対応してきたのであったが、一九二四年にチューリンゲンで牧師集団に語ったときには、批判的な側面が優勢であった。〈キリスト教によつて支配されている〉全ての運動に対して批判することを忘れない限りにおいてなら、民族運動に参加する牧師がいるとしても、それはかまわない、と彼は強調した。

一九二七年までには、シュテーターリンは民族運動に対して格段と批判的になっており、その危険性を一段と明確に認識していた。シュテーターリンは、カンタベリーでの英独神学会議にやつて来た頃、そのことで心を悩ませていた。そのことは、彼の論文からはつきり分かる。また敏感なジョージ・ベルには、シュテーターリンとの議論の中で、そのことがさらに明白であつたことはまちがいない。

ドイツ的愛国心

パウル・アルトハウスも一九二七年にカンタベリーの英独神学会議に出席していたが、彼は全く異なる考えであつた。アルトハウスの〈神の国と教会〉についての論文は、そうした不安には全く言及していなかった。けれども彼は、その夏、いわゆる〈愛国宣言〉を通過させたケーニヒスベルク教会大会（プロテスタントの教会会議）で語り、民族（主義の）問題は、教会の周辺部から中心部に移行したと指摘した。その教会大会に出席していた古参のメンバーたちは、その〈愛国宣言〉を〈祖国の教会大会〉——誰にも何の害悪も及ぼさない人畜無害の古き良き愛国心——として受け入れた。しかし若きパウル・アルトハウスにとつてはそうではなかった。注意深く表現された明瞭な陳述の中で、彼は、新しい政治神学の原理を展開した。その政治神学が、プロテスタント教会と、先ずは民族運動との、後にはナチズムとの完全協調を可能にしたのであった。一九二七年の教会大会で彼の話を聞いた大半の人々には、彼の新しい政治神学は、昔の民族主義者^{ナショナリスト}の保守的な神学の新版にすぎないという印象であつた。しかし現在それを読み直すと、彼がどの方向に向かつていたのかは容易に分かる。そう分かるのは、まちがひなく後知恵のせいである。しかし、当時でも、カール・バルトは不審を抱き、以下のように述べている。

「この講演の中には、私があなた（アルトハウス）に関して注意を引かれるものの全てがあります。同時にそれは不気味でもあります。あらゆる方面に開かれているあなたの才能は、あなたの熱狂によってかき消されてしまうのです。そうした熱狂はまた、私の観点からすれば、あなたがあまりにも限度を超えて事柄をそのまま丸ごと鵜呑みにし、承認してしまう能力でもあるため、いつも私にはあなた自身が奏でるトランペットの響きが聞こえてこないのです。」^①

ベルには、若い世代のドイツ人神学者たちに関するダイスマンの主張が如何に正しかったかが直ぐさま分かったに違いない。イギリスの神学者たちに、ドイツで実際に何が起こっているのかを知らせるのが目的であったなら、ヴィルヘルム・シュテーリンとパウル・アルトハウスの二人を選んだのは、決して最善の選択ではなかったであろう。パウル・アルトハウスがカンタベリー会議に提出した論文、あるいは『キリストの秘義』に掲載された彼の小論文には、このドイツ的愛国心についての指摘が全くなかった。『キリストの秘義』の中の小論文は、贖罪の論理に関する純粹学究的な全く素晴らしい小論文である。カンタベリー会議に際して提出された小論文は、教会大会の講演に関してバルトが批評の中で指摘した方法さながらに、いくつかの概念を覆い隠しているのかもしれない。しかしそれらを見つけるのは難しい。また以下のように、その小論文の最後の部分では、アルトハウスの主張は、ほとんど晩年のボンヘッファーの主張のように聞こえる。

「教会は、文明社会における生の営みのために奉仕を行う。——つまり、しっかりとした良心をもち、終末論的な真実に生きる人物が、教会から外に出て、あらゆる専門的職業と職場に入り奉仕するのである。そして、これは、この世の諸組織に対する、主として間接的奉仕である。しかし、また、教会の責任ある代弁者が、社会的かつ国際的生の営みを司る国家や行政機関を批判することによって、直接的かつ公然と奉仕を行う。真にこの世の一部であり、そうあり続ける教会が、この批判を等しく教会自身に対しても向けるのは、その批判が真剣であることの証左である！」^②

わずか数か月後、アルトハウスは、教会大会の講演で民族運動に関わる二つの問題に立ち向かっていた。つまり、「民族（主義）的・目的から教会に至る道はあるのか」、また「教会から民族（国民）の領域に至る道とは何か」。カンタベリー会議にはシュテーリンも出席していたのに、席上で最初の問題が議論されなかったとはとても思えない。なぜならアルトハウスは、シュテーリン同様、民族主義的な宗教への接近をことごとく非難していたからであった。アルトハウスは、健全な民族運動は、民族主義的な宗教に到達してはならず、教会が宣べ伝えるキリスト教の福音に到達しなくてはならないと論じた。民族運動の到達点は教会となっており、第一の問題は解決したかに聞こえる。しかし、民族（国民）へと向かう教会の動きに関わる二つめの問題がある。アルトハウスはさらに進めて、教会は一つの民族（国民）教会にならねばならないとの結論を引き出した。フオルクスキルヘを、彼は、その民族（国民）の教会、民族（国民）そのもの、生の全体という意味に解釈した。民族（国民）に奉仕することは、民族運動という前提があれば、純粹にドイツ版（的）福音を宣べ伝えることを意味するであろう。それは、教会が民族（国民）の有機体としての生と生活習慣の中に入り込んでいくことを意味するであろう。他ならぬドイツの運命は、この中に巻き込まれていくのである。このようにしてまんまとアルトハウスは、ナチズムに神学的正当性を与えてしまったのであった。

アイゼナハで開かれた第二回英独神学会議にシュテーリンは出席しなかった。しかしベルは、アルトハウスが本当は何を述べているのかを出席者たちに理解させるには、シュテーリンが必要であると思った。第三回の会議にはシュテーリンは戻っており、一九二九年にチチェスターでの神学会議にやって来なかったのはアルトハウスであった。その頃、アルトハウスは、エキュメニカルな議論よりもドイツの運命の方に基づくと深く関わっていた。これら三回の会議は、ナチズムに至るそうした運動のことや、ドイツの運命を成就するための中枢になるようにするプロテスタント教会のディレクタマとをベルが理解する上で極めて重要であった。

〈信仰と職制〉…ローザンヌ会議一九二七年

〈生活と実践〉運動が力を得ていくと同時に、〈信仰と職制〉という、本来、並行していた運動も活発で活動的になっ

た。多くの指導的聖職者たちが両運動に参加していた。ダイスマンは、〈生活と実践〉の継続委員会議長であり、一九二七年にローザンヌで開かれた〈信仰と職制〉会議の四副議長の一人でもあった。彼は、八月四日、木曜日、ローザンヌ会議の初日全日、「全世界に送る教会のメッセージ・福音」と題して力に満ちた講演を行った。「エウ・アン・ゲリオン」というギリシャ語にたいする満足のいく訳語を、英語だけが持っていることを会議の出席者に気づかせた。——「ヘ福音」という言葉を有していることは、英語を話すキリスト教徒に委託された最大の精神的財産の一つである」、と彼は述べた。彼は、教会の一致のために意見を述べた。——画一的な統一のことではなく、一つの言葉「ゴスペル」を世界（この世）に語るという教会の一致を求めて論じた。彼は、教会が一致することで力を得ることを知っていた。この一致による力の及ぶ限り、「ああシオンよ、良き知らせ（good tidings）をもたらす者よ、汝、高い山に分け入りて立て」と説くことが求められている。「力を込めて声を張り上げ」、そして世界（この世）に向かって「汝の神を見よ」と宣言することが求められている。

このテーマを展開しながら、彼には、宣教師としての大きな力がみなぎっていた。

「教会が、福音を、相互不信や孤立という狭い谷や深い奈落の底から説いている限り、教会のメッセージは、世界（この世）には浸透していきません。すなわち、堅い岩壁にぶつかって哀れにも消えてしまいます。谷底の陰と冷たい霧の中に消え去ります。しかし、諸教会が、一致して、今日のシオンとして、聖なる山の山頂に共に登り、そこから、キリストに代わって、遣わされた者として、世界（この世）に向かって大声で、〈汝ら悔い改めよ。神の国は直ぐ近くにあるのだから〉、〈汝ら神と和解せよ〉と叫ぶのです。そうすれば必ず、古代ローマ皇帝たちの時代に、人間の生に対して、そして地中海世界全体に対してさえも新しい方向性を与えてくれたあの福音が、巨大化してしまった世界（この世）に、今、浸透していくであります。今日の世界は、その虚栄と残忍性という不幸の中で、その憎悪、罪の意識、そして混乱の不幸の中で、そうした福音を渴望、切望しているのです。」

ジョージ・ベルは、ローザンヌの会議には出席しなかったが、会議の成り行きを見守ると共に、報告書を丹念に読んだ。彼は、とりわけ最初の二つの部会報告を歓迎した。すなわち、会議が満場一致で採択した「一致への呼びかけ」と、諸教会へ伝達するにふさわしいと会議が認めた「全世界へ送る教会のメッセージ・福音」^⑬とである。

この報告は、ダイスマンの影響を非常に強く受けているが、ベルにとっては大変重要であった。ベルは、この報告を、彼が編集した『キリスト教徒の一致に関する記録』の第二巻に入れた。また、ずっと後年に出た『選集一九二〇—一九三〇年』(第一巻および第二巻から)の中にも残した。『キリスト教徒の一致に関する記録』(第二巻)の原文は、一九三〇年のランベス会議の際、主教たちに配られた。ベルは、ランベス会議では主教で書記(episcopal secretary)を勤めていた。

「メッセージ」から引用した以下の文章を見れば、どうしてベルがそのメッセージを喜んで掲載したかがよく分かる。

「福音は、社会再建のための確かな力の源である。福音は、人類が階級や人種による憎悪から脱出できる唯一の道を宣べ伝えている。階級や人種による憎悪は、目下、国家繁栄の享受、国家間の親善・平和の享受を妨げ、社会を荒廃させている。福音は、東西の非キリスト教世界にたいする、生ける神の喜びに加わるようにとの恵みに満ちた招きでもある。

永遠の福音をまとっている教会は、私たちの世代の苦悩に共感して、すなわち、私たちの世代が知的誠実さ、社会的正義、そして霊的鼓吹を切望していることに共感して、現代世界の必要としているものを満たし、現代世界に対して神が定められた大いなる望みを実現するのである。^⑭」

一九二七年九月、ベルは、マールブルクに二週間滞在した。次のような不可解な書き出しの文章の他には、彼がそこで何をしてきたかをはっきり示すものはない。「私は平穩に過ごした。一日中、一部はレッスン、一部は会合と歓待であった」。習得できることのなかったドイツ語であったが、それを学ぼうと試みていたかのように聞こえる！ もちろん、

彼がイギリスの神学者とドイツの神学者との関係を固めていたときであつたので、他にもマールブルクに滞在する理由は十分あつた。

イギリス国教会の祈祷書改訂に寄せるドイツの関心

一九二七年と二八年、ドイツ人たちは、イギリスでの聖公会祈祷書に関する奇妙な論争を見守っていた。聖公会祈祷書の改訂は簡単にできるはずだと思われていた。一七世紀の祈祷書を現代化することに反対する保守的意見もあるとしても、まさか英国国教会の手に余るほどのことではないと思われていた。ところが、そう考えていた人たちこそ、イギリスにおける国教会の特異性を考慮に入れていなかったのである。一九二〇年代は、アングロ・カトリック「英国国教会のサクラメント的礼拝を強調する派」が優勢であつた。それで、彼らは、聖公会祈祷書の改訂に大きな役割を果たした。ベルは、そのことにさして大きな関心はなかつたが、彼の新しいドイツ人の友人たちに、改訂を巡ってイギリスで繰り広げられている異常なドラマのことを説明しなければならなかつた。その論争は理解してもらえた。高教会系の「教会の権威や儀式を重んじる」ルター派の人々もいる。教会会議 (Church Assembly) で承認されなければならぬことを説明するのも容易であつた。圧倒的多数の賛成を得た。すなわち、主教議會 (House of Bishops) では三四対四、司教議會 (House of the clergy) では二五三対三七、信徒議會 (House of the laity) では二三〇対九二であつた。デイヴィッドソン大主教は、改訂支持には乗り気ではなかつたが、改訂の必要性を通告された。国会の承認がなければ改訂はできなかつた。教会会議でこれほど大多数が賛成であつたので、国会を通過するのは当然自明と思われた。しかし、実際はそうはいかなかつた。改訂反対の先頭に立っていた二人の福音系信徒が、内務大臣ジョインソン・ヒックスと法務次官インスキップであつた。二人とも教会会議のメンバーで、教会会議では負けた。彼らは、その戦いを下院議會に持ち込んで、大きな成果をあげた。祈祷書を改訂して新しくすることは、アングロ・カトリックやローマにおもねることとみなされたのだつた。

そのころ、マーシャー枢機卿とハリファックス卿その他の上院議員たちの間で、アングロ・カトリックとローマ・カ

トリックとの間の教義の共通点に関する会談がもたれたため、その不安はいっそう強まった。会談では早急な結論は出されなかったが、ローマに対するプロテスタント全体の不安を煽ることとなった。

上院議會は、聖公会祈禱書の改訂を求める法案を慎重に審議した。次のように、エイドリアン・ヘイスティングスは、上院で承認を得たときの審議の模様を要約している。

「法案は、上院で三日間（一九二七年十二月十二日から十四日）審議され、上院を通過した。国教会に関して一般信徒および主教たちの立派な意見が提出され、典礼の改訂に関する賛否両論が慎重審議された。審議そのものは、国教会制度 (Establishment) を大筋で正しいとした。」⁽¹⁷⁾

下院議會ではこうはいかなかった。審議は短く簡単に、悪口と見当違いな言葉に満ち、法案は一九二七年十二月と一九二八年一月の二度にわたる否決という結果に終わった。

この時、ベルは、カンタベリーの首席司祭 (Dean) で、国教会制度には断固賛成であった。下院での一度目の敗北後、彼は、ジェイローの主教に、「もし、夏になつても国教会制度への反対の叫びが上がっているなら、私たちは共に同じ演壇に立ち、国教会制度廃止に反論しましょう」と手紙を書いた。

英国国教会のしようとしていることを、ドイツの教会人たちは大変興味深く見守った。ワイマール共和国では教会と国家とは分離されており、ドイツ人は、国家と教会とのこの関係の変化に対して敏感になっていた。この関係について、ドイツ人は満足のいく解決を見出していなかった。皇帝の退位後、彼らは孤児状態となつてしまつていた。かつて「玉座と祭壇」との間には強い絆が存在していた。それに代わるものを見つけるのは不可能であると判つたのである。共感してイギリスを見守る者もあつたし、過激な助言をする者もあつた。どんな世俗の組織も、教会に対して、その礼拝の言葉を指図することは許されない。そのようなことがなされた場合は、国教会制度の廃止が唯一の答えであつた。他の人々は、イギリスの紛糾を見て、ひたすら同情を寄せた。アドルフ・ダイスマンは、この決定的な期間に二度ベルへ手

紙を書いた。

「一九二八年一月九日…極めて深い関心と心からの共感を寄せて、貴国の近年の教会史におけるこの重大な出来事の成り行きを追ってきました。」

「七月十二日…あなたの教会人生であなたが受けた辛い経験に関して、一言共感の言葉を送りたいと思います。アイゼナハ[第二回英・独神学会議]の席であなたの考えを伺い、私は非常に心配しています。」

アイゼナハでは、その問題に多くの時間がかけられたこと、そして、ダイスマンの他にもベルの考えを聞いて心配した人たちがいたことは、まず間違いない。ほどなくして、翌年一九二九年に、ベルは、『英国教会の概略』を出版した。その小本は、英国国教会のディレンマをドイツ人が理解するのに、大いなる助けとなった。この時すでに、ベルは、チチエスターの主教となっていた。そしてベルには、自分の管区の諸教会に、議会の承認を受けられなかった「新」祈祷書の使用を、奨励あるいはさらに認可すべきかどうかは、宗規の問題 (matter of discipline) であると思えた。その問題について、彼は、教会宗規 (Ecclesiastical Discipline) に関して王立調査委員会 (Royal Commission) から一九〇六年に出された報告にまで遡って調べた。そこでは、大教区主教会議 (Convocation) が「議会による制定を期待して」祈祷書改訂提案の準備をするように勧告していた。

問題は終わった。主教たちは、自らの信条にしたがって、一九二八年版の「新」祈祷書の使用を許可あるいは奨励した。そしてプロテスタントの抵抗は時と共に弱まった。しかし、ベルは、この時の経験を通して、ドイツの友人たちと非常に親密となり、彼の本は、ドイツの友人たちが英国国教会のもつ独特の性格について理解する助けとなった。ベル自身の考えとしては、祈祷書の改訂にはさほど賛成ではなかったが、教会の典礼に関しては、教会が自ら制定するべきであると確信していた。

「もし教会がこのまま国教会であり続けるなら、旧理論に従って、この世の (temporal) 事柄に関しては議会が法を制定するように、宗教的な (spiritual) 諸問題に関しては、大教区主教会議が、国王の同意を受けることだけを条件として、実際上かつ最終的に決定することがこれまで通り可能にはできないのかと尋ねることは差し支えない。」⁽¹⁸⁾

ジョージ・ベルとドイツとの関係にとつて、この議論は重要であつた。二、三年後にドイツで起こる出来事の内にもその重要性はあつた。なぜなら、その時、ベルは、ドイツの教会が直面することになるさらにずっと決定的な教会と国家に関する論争を理解する、実に数少ないイギリス人聖職者の一人となるのであつた。

一九三〇年のランベス会議

英国国教会のほとんどの主教たちは、任期中に一度はランベス会議に参加する。多くの主教は二度、なかには三度参加する者も少しある。しかし、ジョージ・ベルは、三八年に亘る期間に四度のランベス会議参加という榮譽を得た。彼は、四度の会議の全会で、一致と平和という大義を強く主張した。それは、一九二〇、一九三〇、一九四八、そして一九五八年の会議であつた。もちろん、彼は、一九二〇年には主教ではなかつた。しかし、大主教付きの司祭 (resident chaplain) として、彼は、会議の書記補を勤めた。そのような役職がら、彼にはすでにかなりの影響力があつた。一九二〇年のランベス会議で、ヨークの大主教コスモ・ラングは、「カトリックと英国国教会との」再合同 (Reunion) に関する委員会の議長を務めた。彼は、英国国教会に対してだけのアピールより、むしろ「全キリスト教徒国民へのアピール」という計画を思い抱いていた。そのアピールを起草するために、若手主教たちから成る小委員会の創設を提案したのがベルであつた。そして、ベルは、自らそれら若手主教たちの書記を勤めた。そのアピールは、彼の著書『キリスト教徒の一致に関する記録』の一番目の記録文書に選ばれている。そのアピールは、世界（この世）に向かつて共に

交わり、共に宣教し、共に奉仕するよう呼びかけ、次のように結んでいる。

「私たちは、この理想を、第一番に私たち主教自らと私たちの教区民の前に掲げる。新時代の要求に対して私たちが新しい視野で応えるよう努力することを求める。私たちの言葉は、他のキリスト教徒にも届くであろう。そのようなキリスト教徒全てに対して、私たちは同一のアピールをする。いかなる教派も、他の教派への併合に同意するよう求めているのではない。キリストが祈り求められたのは、キリストの身体が一つであることである。そのことをこの世において回復し、明示するという、新しい壮大な試みに向かって、全てのキリスト教会が一致すべきであると、私たちは求めている。」^⑩

一九三〇年のランベス会議には、ベルもチチェスターの主教として出席したのであったが、この会議があつたために、第三回英一独神学会議は一九三二年三月まで延期された。

若干の、特に若手の主教たちには、このランベス会議は全くと言ってよいほど重要ではなかった。さらに重大な^{ナショナル}国家的問題が起こり、ランベス会議の影が薄くなっていたからである。一九二九年十月二四日、ニューヨーク株式市場は暴落し、世界中で経済不況の動きが始まった。一九三〇年七八月のランベス会議の開催時まで、イギリスにおける失業者数は二百万以上という空前の数にまで増大してしまった。労働党政府は揺らぎ、ついには倒れた。一九三一年八月に連立政府が後を継いだ。この経済恐慌の中にあつて、ランベス会議はまるで時代的意味をもたないかのようであつた。ベルは、ランベス会議の書記として、自らの仕事を完全に行い、平和と一致を求めて懸念を力説した。しかし、一九三〇年になつても、英国国教会は、驚くほどヴィクトリア朝的で時代遅れに見えた。大主教はコスモ・ラングで、確かにヴィクトリア女王時代の人であつた。彼は、英国国教会に対して、ほとんど、あるいは全くと言っていいほど統率力を発揮しなかった。彼の側近には、ウィニングトン・イングラム（ロンドン）、ヘッドラム（グロウセスター）、そしてヘンソン（ダーラム）がいた。彼らは皆、ヴィクトリア女王が亡くなる以前に名をあげていた人物である。英国国教

会は、国民の支持を失い、容易に沈滞した。パブリック・スクールにおいて一種の信仰復興リヴァイヴァルのようなものはあったが、二十年代の選挙が示すように、国民は概して左に向きを変えつつあった。彼らが少しでも教会に行くとするれば、それはメソジスト教会であった。メソジスト教会は連合をすることで、自らの教派に新しい活力を添えた。しかしながら、若手の主教の中には左翼傾向があり、時代の社会問題に取り組もうという決意のある者もいた。エイドリアン・ヘイスティングスは、こうした若手主教に入る人物として、ジョージ・ベル、後にオックスフォード主教となるケネス・キルク、後にウィンチェスター主教及びヨーク大主教となったサウスワークの主教シリル・ガーベツトをあげている。しかし、一九二九年に若干四七歳で、マンチェスター主教からヨーク大主教へと権力の頂点に達していたウィリアム・テンプルについては、特別に除外している。ベルは、一種の信仰復興リヴァイヴァルを感じ取り、その中心となった。

ハーバート・ヘンズレイ・ヘンソン主教が一九三〇年のランバス会議の期間中に書いた手紙がある。その手紙は、新時代の問題に関する老主教たちの困惑ぶりを要約している。その手紙はある若手の聖職者に宛てられたもので、会議前夜の夕食の時にロンドンで出会った若い既婚の婦人の率直さにヘンソンが驚いたことが書いてある。その女性は、パリス・コント・ロール産児制限という避妊ができる以上は、未婚の女性が愛人をもつてもおかしくないと主張したのであった。ヘンソンはびっくりし、主教たちがランバス会議でパリス・コントロールの問題を審議しますと答えたという。その女性は、「避妊具の使用は私の階層では普通のことで、それがどうして問題なのか私には理解できない」と答えたのであった。ヘンソンは次のように説明している。

「私は大変興味をそそられ、彼女の自信、遠慮のなさ、そして慣習的な性道徳から完全に外れてしまっていることに少なからず驚きました。私は、現代の諸問題を理解しようとするとき、自分が過去の世代に属していること、恐らく、何となく暗いと感じながら闇の中を歩いていることが分かりました。このバビロンに背を向けて、足から塵を払い落とすことができ、オークランドに戻れるとき、私は満足するでしょう。」²⁰

ベルは実に多くを成し遂げたが、ランベス会議は単調であつた。同じ年一九三〇年は、アウグスブルク信仰告白の四百周年でもあつた。その式典は、ドイツのプロテスタントにとつて重要であつた。また英国国教会にとつても当然重要であつたはずである。なぜなら、英国国教会の〈三九箇条〉は、アウグスブルク信仰告白に由来しているから。しかし、ランドール・デイヴィッドソン「ベルの司祭時代の天主教」には一九一七年に宗教改革四百周年の式典が余りにも議論の余地があるように見えたのと同様、アウグスブルク信仰告白の四百周年式典への参加も、余りにも議論の余地があると考えられ、イギリスではほぼ無視された。ベルはしかし、自分のところチチェスターの首席司祭であるA・S・ダンカン・ジョウンズを、オブザーバーとしてアウグスブルクの祝典に送つた。こうして、ドイツの諸教会への生涯にわたる関心が彼の内で胎動し始めた。

第三回英・独神学会議

ジョージ・ベルは、一九三一年三月、英・独神学会議参加者をチチェスターに招いた。イギリスはまだ金融危機の真つただ中にあつた。ドイツはさらに悪く、ナチズムがドイツの諸教会で猛威を振るつていた。それは世界連盟のケンブリッジ会議にボンヘッフアーが参加した年であつた。ケンブリッジ会議に先だつて、ドイツの立場を明らかにするために、準備会議がハンブルクで開かれた。アルトハウスは、エマニュエル・ヒルシュと共に、「我われドイツ人と世界大戦の戦勝諸国との間には、相互理解はあり得ない」との声明を出した。

チチェスターでの英・独神学会議は、会議の主題として〈ヘ・キ・リ・ス・トの身体（からだ）〉を選んだ。会議のために準備された諸論文は、『神学』の中に再掲載された。現在、それらの論文を通読すると、ドイツで起こりつつあつた事柄の影響は簡単に見いだせる。

一九三〇年九月の〈帝国議会選挙〉の結果は劇的であつた。おおかたの国民は、ナチスの前進を予想していた。しかしそれは圧倒的大勝利であつた。二年余りでナチ党は、得票率を二・六%から一八・三%に伸ばし、帝国議会における議席数を二一から一〇七に増やした。選挙結果を慎重に検討すれば、主にプロテスタント地域でより多くの票が獲得さ

れたことが分かるはずである。

このことは、プロテスタントが特定のプロテスタント政党を持っていなかったという事実から部分的に説明がつく。カトリックは中央党 (Zentrum) を持つており、中央党は、カトリック地域で高い得票率を挙げた。社会主義者「社会民主党の候補者」たちもプロテスタント地域で高い得票率を挙げたという事実から、このことは説明がつく。しかし、さらに理由はある。プロテスタントは、旧体制「帝政」への信頼を無くしてしまっていたが、「新体制の」ワイマール共和国への支持は減り続けていた。この時点で、彼らは道に迷っており、大義を必要としていたのであった。ドイツにおける神学は、神学者間で処理され、教会生活にはほとんど影響を与えないことなく、ずっと孤立主義を保ってきた。社会問題とも関わる力強いプロテスタント神学であったならば、混乱する政治的背景の中でも、彼らプロテスタントが自らの道を見出す助けとなったであろう。

状況は、しかしながら、変化していった。一九三一年一月、カール・バルトは、生き生きとした大勢の聴衆の前に講演した。その八日後、オットー・ディペーリウスが彼に反駁し、ベルリンでは社会論争が起こった。しばらくして、ディペーリウス総教区長は、チチェスターで開かれる英独神学会議に参加するためイギリスにやって来た。そして、ベル主教と共に会議の議長を務めた。ベルリンでの論争点は、ディペーリウスが主張したように、理論と実践との間の対決ではなく、まさに教会の基礎そのものの抜本的再検討の必要性についてであった。この問題は、プロテスタント教会の指導者の中に若い世代が起こり仲間入りしてきた。若手のドイツ人牧師ヘルマン・ザッセが、この最もよい例であった。ザッセは、第二回アイゼナハおよび第三回チチェスターの英独神学会議に参加した。ザッセは、ドイツ神学の状況を次のように説明した。「神学と教会の実践活動との間に決定的な亀裂が広がってしまった」、「教会再建という現実的活動と高尚な神学的活動とは、過去十年間、お互いに実質的には何の関係も持っていない状態である」。

チチェスターの会議の席上、ヘルマン・ザッセは自らの論文「制度上に表現された（キリストの身体としての教会という）理念の本質」を読み上げた。²⁾ 彼は、ベルリンの論争をチチェスターの神学会議にあらさまには持ち込まなかった。しかし、彼もディペーリウスも、お互いが何を言ったのか解っていた。それでも、ザッセは、その論文の中の、信

者の共同体は〈ヘキリストの身体〉と呼べるという、キリスト教特有の考えを説き始めたのであった。

注

* 本稿は、エドウィン・ロバートソン著『揺るぎなき友 ジョージ・ベルとドイツの教会』一九九五年 (E. Robertson: *Unshakable Friend George Bell and the German Churches*, 1995) より、その第二章「神の国と人間社会との関係」(Ecumenical For nation) の邦訳である。訳者は、上掲書の第三章「ジョージ・ベルとディートリヒ・ボンヘッファー」の邦訳を、四国学院大学『論集』九五号「一九九七年十二月」に掲載したのを最初に、これまでに同『論集』(九六号「一九九八年三月」、九七号「一九九八年七月」、九八号「一九九八年十二月」、九九号「一九九九年三月」、四国学院大学社会学部社会科学年誌編集委員会『社会科学年誌』(八号「一九九八年三月」、九号「一九九九年三月」、十号「二〇〇〇年三月」) ならびに四国学院(大学)キリスト教教育研究所『年報』(七号「二〇〇〇年三月」、八号「二〇〇一年三月」)に掲載してきた。本稿は、上掲書の邦訳としては最後の章になる。

* Kazuaki YAMASAKI 四国学院大学社会学部教授(応用社会学科)

凡例

「」内は山崎による補訳。

原注

- (1) *Mysterium Christi*, edited by G.K.A. Bell and Adolf Deissmann, Longmans, Green & Co., London, 1930, p.283.
- (2) *Ibid.*, p.284.
- (3) *Theology*, SPCK (Society for Promoting Christian Knowledge), London, Vol. XIV (Jan-June 1927), p.284.
- (4) *Ibid.*, p.285.
- (5) *Ibid.*, p.255 (トキスノ全体ヲ pp.249-255).
- (6) *Ibid.*, p.260 (トキスノ全体ヲ pp.259-260).
- (7) *Ibid.*, p.295 (トキスノ全体ヲ pp.293-295).
- (8) *Ibid.*, p.294.
- (9) Klaus Scholder, *The Churches and the Third Reich. Vol. 1*, SCM Press, London, 1987, p.74.
- (10) *Ibid.*, p.110 (ズイン語ヲキスノヲ Wilhelm Stählin. *Via Vitae: Lebenserinnerungen*, Kassel, 1966, pp. 176-191).
- (11) *Ibid.*, p.112 (一九二七年九月一九日付の書簡ヲ).
- (12) *Theology*, Vol. XIV, p.292.
- (13) Klaus Scholder, op. cit., Vol. 1, pp.111-113.
- (14) *Faith and Order: Lausanne 1927*, edited H.N. Bate, SCM Press, London, 1927, p.46.
- (15) *Ibid.*, pp.460-463.
- (16) *Ibid.*, pp.462-463.
- (17) Adrian Hastings, *A History of English Christianity 1920-1985*, Collins, London, 1986, pp.205-206.
- (18) G.K.A. Bell, *A Brief Sketch of the Church of England*, SCM Press, London, 1929, p.124.
- (19) *Documents on Christian Unity 1920-24*, edited G.K.A. Bell, OUP, 1924, p.5.

(20) *More Letters from Herbert Hensley Henson*, edited E.F. Braley, SPCK, London, 1954, pp.62-63.

(21) *Theology*, Vol. XXII, pp.318-323.